

広報

# あかいけ

# 10

いくつもの時代を越えて、磨かれ、育まれてきた技と情熱。  
福智の懐に抱かれた伝統の炎は、いまも熱く息づいています。  
上野焼の火がともされて四〇〇年。その記念すべき年二〇〇二年  
に向かって、静かに、そして力強く動きはじめました。  
新しい時代の扉を開く「上野焼四〇〇年祭」。この町に住むわた  
したち全員のコラボレーション（共同作業）を目指して――。

◎特集

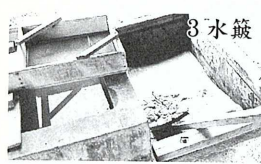
あが  
の  
やき

# 上野焼

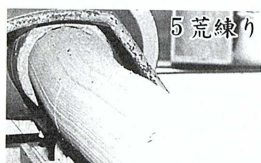
## 上野焼ができるまで



1 土乾燥



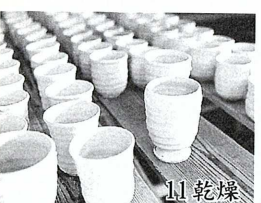
3 水篩



5 荒練り



8 成形



11 乾燥



13 釉掛け

### 1 土乾燥

掘った土を色や性質などで分けて約15日間ほど乾燥させます。

### 2 粉碎

乾燥させた土を粉碎機で粉状にします。

### 3 水篩

土をこして粘土状にします。

### 4 脱水

脱水機で陶土の余分な水分を出します。

### 5 荒練り

土練機や足踏みで土を練り、ねかしやすい形にします。

### 6 ねかし

こねた土をしばらくおきます。2～5カ月ほどかけてなめらかにします。

### 7 手練り

土の空気を抜きキメを細かく整えます。成形前に手作業で行います。

### 8 成形

ろくろ、たたき、たたら、手びねり、型押しなどの方法で、やきものの形をつくります。

### 9 半乾燥

仕上げの作業をしやすくするため約2～3日ほど半乾燥させます。

### 10 仕上げ

生乾きの状態で高台(茶碗や皿などの底にある丸い輪の形をした部分)を削り出します。上野焼や窯の刻印や彫刻・型起こし・手起こしなど装飾や変形する場合もこの段階で行います。

### 11 乾燥

形のできあがった状態で4日以上かけて完全に乾かします。

### 12 素焼き

800～850度で焼きます。強度と吸水性を増し、絵付けや釉掛けが簡単になります。

### 13 釉掛け

釉薬を掛けることで装飾性、強度、表面のなめらかさを増し、吸水性をなくします。

### 14 窯詰め

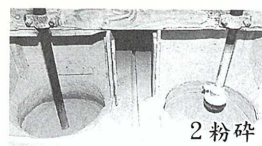
火の強さを考えながらバランスよく窯の中に詰めていきます。

### 15 焼成

1200から1260度の高温で焼き固めます。釉薬の特性によって酸化炎・還元炎・中性炎を使い分け、目的温度も変えて焼き上げます。

### 16 窯出し

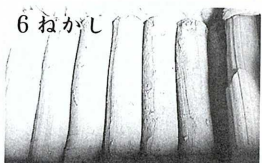
窯から出して完成です。



2 粉碎



4 脱水



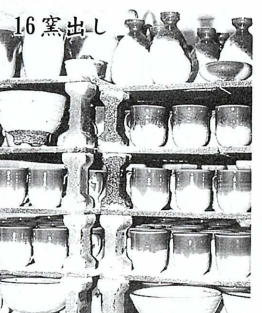
6 ねかし



9 半乾燥



10 仕上げ



16 窯出し

行程での半分近くが土づくりです。生き物である土は、長い月日をかけ丹精こめて、やきものに適した状態に

仕上げられます。『土もみ三年。ろくろ十年』といわれるほど、土の特徴を肌で感じ、土と対話しながら成形できるようにするまでには、かなりの年月が必要になります。

土はやきものの命。細心の注意を払う土づくりは、行程の中で最も重要な作業なのです。

### 多種多様で上品な薄づくりが特徴

上野焼の特徴は茶陶らしい上品な薄づくりにあります。酸化釉薬を使った『緑青流し』が一般に知られていますが、実際には灰釉、銅釉、鉄釉など、いろいろな釉薬が使われています。釉薬によって肌合いや艶が違い、個性的で多彩なのも上野焼の特徴。一つの窯元で陶土づくりから成形・絵付け・焼成まで行い、窯元ごとに伝統を継承しています。

現在では茶陶だけでなく、食器・飲器などの生活用品も多く作っています。四〇〇年の伝統と、洗練された現代感覚の調和が上野焼の趣を創り出しています。



焼成の様子。薪で窯の火を調節しながら1200～1260度の高温で焼き固める。近くで体感する熱波はすさまじい。

# 創る

四〇〇年近い伝統を育みながら常に新たな美しさを求めていく…。洗練された技が格調高い趣を創り出しています。



上野焼協同組合理事長  
青柳 一夫さん

やきものは何といても土が命です。手の中で土の性格を感じ取り、ろくろで土と相談しながら形をつくっていきます。

▶仕上げの瞬間。上野焼の証である『巴(ともえ◎)』の印を一瞬で彫り上げる。したたり落ちる汗をぬぐう間もない。

